



練習風景



風流節頭 保存会

世界に認められたのは

変わらない「奉納の心」

祭りは感謝の表現 365日祭りといえ

「祭りの背景にある文化に目を向けることに意味があります」と西田さん。例えば、風流を奉納する稚児の子どもたちは、神様の随身とされています。例年、祭りが開催される10月15日の早朝に菜切川で身を清め、それぞれの頭を採寸して作った獅子

頭を模した笠を身につけます。獅子頭を使わず、笠を手作りする理由は、西田さんいわく「そもそも神様は、新鮮なものや新しいものが好きだから」だとか。祭りの特色であるユニークな笠は、神様に少しでも喜んでほしいと願う人々の心から生まれた習わしなのです。

神社の歴史を専門的に学んだことはなくても仕事柄、多くの宮司さんたちとお話しする機会に恵まれたという西田さん。そうした中で特に印象的だったのは「例大祭を催す日だけが祭りではなく、365日祭りです」というある宮司さんの言葉。「元旦を起点に新しい『祭り』が始まり、秋の収穫後、祭りの機運が最高潮に高まる日に五穀豊穡と家内安全に感謝する大祭を催し、1年を締めくくる。それが本来の流れなんですよ」。地域の人々の心に、常に感謝の思いが宿ること、それが西田さんをはじめ、祭りを受け継いできた先人たちの願いです。

祭りを彩る習わしの 真意に目を向けて

「野原八幡宮風流がユネスコ無形文化遺産に登録されました。大変光栄なことですが、私たちはただ粛々とできることを続けていくだけです」と話すのは、「風流節頭保存会」の会長・西田道世さんです。大学で考古学を専門に学び、玉名市役所を退職した後、7年前から会の副会長に、そして現在は会長を務めています。冒頭で「ただ粛々と」と語った言葉の真意を尋ねると、「登録されたか」と言いつつ、どんどん格好をつけ始

めると、祭りの形も、人の心も変わってしまいますからね」と西田さん。約770年前から今日まで風流節頭行事が受け継がれて来たのは「人々の小さな伝承の積み重ねの賜物」と言います。「祭りに必要な馬がいな

会長 西田道世さん



今年で役目を終える稚児の2人

風流で舞う稚児は、おおよそ小学1年生から6年間、同じ子どもが担当します。6年間の役目を終えると「師匠」となり、次の代の稚児にその伝統や技術を引き継ぎます。コロナ禍もあり、特例で任期を延長した野原地区の2人が今年で役目を終えます。



10月に奉納したときの濱崎さんと三上さん。

みかみ たいし
大牟田中 三上 大心さん
2月に最後の太鼓を叩いたら終わりです。初めは、頭にかぶる「笠」が重くてきつかったのが印象に残っています。師匠になったら教えてもらったことをちゃんと伝えられたらいいなと思います。



はまさき こはる
四中 濱崎 琥晴さん
最初はうまく出来なかったけど、ビデオなどを見て練習しました。稚児の役目が終わ리と思うと、もっと続けていたかったなと感じました。次の稚児が上手くなるように頑張りたいです。



先人たちから伝えられてきた野原八幡宮風流を これからも絶やすことなく、後世に受け継いでいきましょう!